バイオマス等 地域エネルギーを地域の事業にする実践
Biomass Energy Development as Local Venturing

山口 勝洋
Katsuhiro Yamaguchi

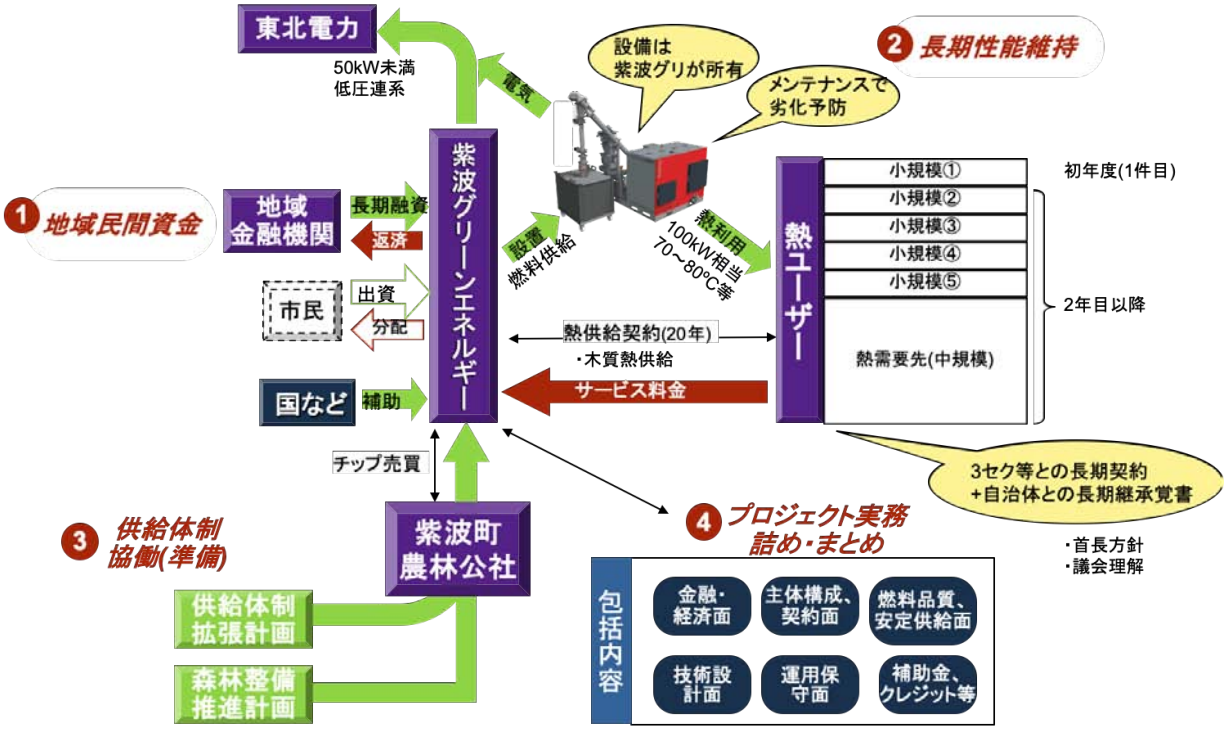
岩手県紫波町や宮城県気仙沼市などで、木質バイオマスをエネルギーとして活用する事業を、筆者らが実践してきた事を紹介する。

木質バイオマスは、地域の森林を整備しながら、低質材を燃料として利用するもの。サプライチェーンには様々な人々が関わり、仕事や副収入を生む。また、地域内の協同関係によってのみ、成り立つ事業でもある。

紫波では駅前の開発地区に対し、地域熱供給を行っている。開発計画と並行し、町役場や立地事業者らとの密な検討・協議を経て、実現にこぎ着けた。これにより、40 を越える戸建住宅や、町役場、ホテル･体育館、保育所に、熱を供給し、石油を燃やして海外に資金を流出させるのでなく、地域のエネルギーを地域で活用し、お金も地域内に回る姿を実現している。

筆者らはこれら取組を、地域が意志を持った取組とするべく、共同にて地域エネルギー会社を設立してきた。盛岡で設立した際にも、信用金庫や設計士など、地域関係者との共同とし、外部人材である筆者らはあえて半分以下の出資比率にするなど、考えに基づいた形としている。

事業モデルとしては、地域金融機関からの融資や市民出資など、共同的な意志を持った資金を活用し、設備投資はそれら外部資金で賄うなど、普及のハードルを下げている。エネルギーを設備投資ではなくサービスとして、地域身の丈の小中規模ながら、事業が成り立つように、作っている。



木質バイオマスは、農閑期や、勤め人にとっての週末など、副業として森林整備に関わる事の入口として、ハードルが低い。地域で仕組みを作ることにより、個人や地区グループが参加できるようになる。エネルギー利用を入口として、より本質的な森林整備、農林地域での協働の浸透につなげていきたい。